

# 日本英文学会九州支部第 73 回大会 (ウェブカンファレンス)

期日 2020 年 (令和 2 年)  
10 月 24 日 (土) ~ 28 日 (水)

日本英文学会九州支部  
〒819-0395 福岡市西区元岡 744  
九州大学基幹教育院  
大橋浩研究室内  
TEL (092) 802-6034  
E-mail: [elsj.kyushu.branch@gmail.com](mailto:elsj.kyushu.branch@gmail.com)  
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

## 2019-20 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

鵜飼 信光	(九州大学)
大島由起子	(福岡大学)
大津 隆広	(九州大学)
大橋 浩	(九州大学)
木下 善貞	(北九州市立大学名誉教授)
後藤 美映	(福岡教育大学)
小林 潤司	(鹿児島国際大学)
高野 泰志	(九州大学)
高橋 勤	(九州大学)
竹内 勝徳	(鹿児島大学)
西岡 宣明	(九州大学)
虹林 慶	(熊本県立大学)
早瀬 博範	(佐賀大学特任教授)
福田 稔	(宮崎公立大学)
山田 英二	(福岡大学)

## 2020 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	大橋 浩
副支部長	大津 隆広
『九州英文学研究』編集委員長	小林 潤司
事務局長	田中 公介
書記	西村 恵
書記	大塚 知昇
書記	永次 健人

# 発 表 一 覧

## 研 究 発 表 イギリス文学部門

1. *Great Expectations* における感染症のイメージ——免疫システム的情報交換  
就実大学講師 原田 昂
2. 不都合な共感——『日陰者ジュード』における共感と進化論  
(招待発表) 福岡大学准教授 福原 俊平
3. 感染症の時代に読み直す『ロミオとジュリエット』  
(招待発表) 福岡大学教授 鶴田 学

## アメリカ文学部門

1. Philip K. Dick の *Do Androids Dream of Electric Sheep?* に見るポストヒューマニズム  
——主人公リック・デッカーとテクノロジーの関係性を考察して  
西南学院大学大学院博士後期課程 毛利 優花

## 英語学部門

1. 日本語母語話者による英語語末子音連続の促音知覚——子音の順序と無音区間の影響  
福岡大学4年 佐藤 正直  
福岡大学4年 久川 瑠奈  
福岡大学准教授 竹安 大
2. 音節構造と母音持続時間——英語の一音節語の場合  
福岡大学大学院博士課程前期 石橋 頌仁
3. 英語における音象徴——ヒーローのイメージに関する実験研究  
福岡大学大学院博士課程前期 神谷祥之介
4. 省略文に課せられる同一性条件再考  
九州大学大学院修士課程 末永 広大
5. 場所句倒置構文の派生と構造  
九州大学大学院修士課程 宮元 創
6. 周辺部構造における数量詞遊離現象  
九州大学大学院修士課程 川満 潤
7. 英語と日本語の二次述語の比較考察  
九州大学大学院修士課程 久保田 舞
8. *Tough* 構文のフレーム分析——主語の属性について  
九州大学大学院修士課程 藤原 実莉
9. *There* 構文の派生  
九州大学大学院修士課程 森竹 希望
10. 逆接が認可する述語前置  
九州大学大学院博士後期課程 高場 清子

11. Merge に伴う不可避的複雑性の増大と最小性について

九州工業大学非常勤講師 山本 将司

12. 変化結果を表す *in/into* 前置詞句の交替について

(招待発表) 九州大学教授 江口 巧

## シンポジウム

### 英語学部門

焦点化現象に基づく統語構造研究

司会	九州大学教授	西岡 宣明
講師	九州大学助教	大塚 知昇
講師	西南学院大学准教授	前田 雅子
講師	九州共立大学准教授	黒木 隆善
講師	産業医科大学講師	下仮屋 翔

# 研究発表

## イギリス文学部門

### 1. *Great Expectations* における感染症のイメージ——免疫システムの情報交換

就実大学講師 原田 昂

1860年、Charles Dickens は自身が編集する雑誌に天然痘のワクチン接種義務化をさらに推し進める記事を掲載した。この記事は Dickens が、免疫システムを「自己」が「非自己」を取り入れたうえでなお「自己」であり続けるシステムだと理解していたことを示唆している。これは、当時としては非常に先進的な視点である。本発表では、この記事が掲載された年に連載が始まった *Great Expectations* の分析から、Dickens の免疫システムに対する理解を読み解く。本作品には、感染症的なイメージで描写される場面が3箇所ある。1つ目は、Pip が Estella に出会い、「自己」を「非自己」化する場面だ。2つ目は、Bidley が「非自己」的な知識を「自己」として取り組むことを語る場面だ。3つ目は、Pip を訪ねてロンドンを訪れた Joe が、咳き込みながらも「自己」を保ち続ける場面だ。これらの描写は、Dickens の免疫システムに対する先進的な理解を示す。

### 2. 不都合な共感 ——『日陰者ジュード』における共感と進化論

(招待発表) 福岡大学准教授 福原 俊平

本発表では、トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の『日陰者ジュード』 (*Jude the Obscure*) における共感のアイロニーについて論じる。ハーディが進化論の影響を強く受けたことはよく知られているが、当時の進化論においても、共感や利他主義は重要なテーマであり、共感する能力は高い道徳性の礎であり、人間社会の文明化という人類の進化の原動力とみなされた。『ジュード』において、共感は重要な要素となっており、虐げられる動物に対する哀れみと登場人物の苦境が幾度も重ね合わされている。そもそも、ハーディの芸術論においては、共感によって外面から他者の内面へと入り込んでいく能力は、優れた作家にとって必須のものである。『ジュード』において興味深いのは、主人公たちが強い共感の能力をもつ一方で、その繊細な感受性は社会において報われることなく、むしろ不利益を被るというパターンが繰り返し表れることである。本発表では、このような共感のアイロニーが進化論の二面性に由来していることを示しながら、そのアイロニーがもたらす効果について議論する。

### 3. 感染症の時代に読み直す『ロミオとジュリエット』

(招待発表) 福岡大学教授 鶴田 学

2020年3月、首都ロンドンから次第に周辺地域へと感染拡大していった新型コロナウイルスの影響で、シェイクスピアの故郷ストラットフォード・アポン・エイヴォンも徐々にロックダウンしていった。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの劇場が封鎖された3月17日、町の中心にあるウォーターストーンズ書店の棚には、あたかも場違いな冗談のように、黒い表紙に白い髑髏が描かれた『シェイクスピアによる死』が注目の新刊書として並んでいた。薬学を専門とする著者キャサリン・ハーカッ

ブによれば、劇作家シェイクスピアの創作活動を総体的に捉えたとき「疫病などの感染症はほぼ無視されている」と言う。だが、新型コロナウイルスによって自粛を求められ、恐怖やフラストレーションを体験した我々にとって、感染症という主題は、無視できないばかりか、最も切実な喫緊の課題である。本発表では、現代社会との類比から『ロミオとジュリエット』を読み直す新たな視座を提示する。

## 研 究 発 表 アメリカ文学部門

### 1. Philip K. Dick の *Do Androids Dream of Electric Sheep?* に見るポストヒューマニズム

——主人公リック・デッカーとテクノロジーの関係性を考察して

西南学院大学大学院博士後期課程 毛利 優花

フィリップ・K・ディックの *Do Androids Dream of Electric Sheep?* (『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』、1968) は、人類が減びていくなかでテクノロジーが発達し、アンドロイドが影響力を持つ可能性を内包した現代社会への警鐘ともとれる SF である。

主人公のリック・デッカーは、地球に人間の振りをして紛れ込んでいるアンドロイドを探して殺すバウンティ・ハンターである。最大のモチベーションは本物の動物を買うことであり、アンドロイドや飼っている電気羊への憎悪はテクノロジー嫌悪の表われである。動物や自然をも自分の意のままにしたいと考えるデッカーであったが、購入した山羊が殺されたことをきっかけに自殺をしようと赴いた荒野である生き物に出会い、テクノロジーや自らの生きる社会への考え方に変化が生まれる。

今発表では、人間と人間ではないもの、生物的なものとの関係性に注目し、主人公がテクノロジーの役割と自らが生きるポストヒューマンの世界を認識するまでの道のりを考察する。

キーワード : Philip K. Dick, technology, animals, posthumanism, human/nonhuman

## 研 究 発 表 英語学部門

### 1. 日本語母語話者による英語語末子音連続の促音知覚

——子音の順序と無音区間の影響

福岡大学 4年 佐藤 正直

福岡大学 4年 久川 瑠奈

福岡大学准教授 竹安 大

英語からの借用語において、/s/と/k/から成る子音連続においては、/sk/には促音挿入が起こらないのに対し、/ks/にはkに促音挿入が生じるという非対称性が見られる。この借用語における音韻的非対称性は、音声知覚に起因するものである可能性が指摘さ

れているが、先行研究の実験結果は借用語の音韻知識が音声知覚に影響を与えたために生じたものである可能性も否定できない。そこで、この非対称性が音声知覚によって生じたものであるかどうかを明らかにするために、11名の日本語母語話者に対して知覚実験を行った。実験の結果、英語に存在する子音連続でも、存在しない子音連続でも、閉鎖音が先に知覚されると、摩擦音が先に知覚された場合と比べて促音判断率が高くなることが判明した。このことから、借用語における促音挿入の非対称性が音声知覚（子音の順序と促音挿入の間の相関）に起因するものである可能性が示唆された。

## 2. 音節構造と母音持続時間——英語の一音節語の場合

福岡大学博士課程前期 石橋 頌仁

世界の複数の言語において、閉音節に先行する母音の持続時間は短いということが指摘されている。では同じ閉音節同士で比較した場合、頭子音及び尾子音の数が母音持続時間に影響するのであろうか。本研究では、音節構造が異なる複数の単語の母音持続時間を比較し、頭子音及び尾子音の増加が母音持続時間に対してどのような影響を与えるのかを明らかにするために、英語母語話者に対して音声産出実験を行った。各単語の母音持続時間に対する分散分析及び多重比較の結果、英語の一音節語において、同じ閉音節中であっても、尾子音の数が増えることにより、母音持続時間がより短くなるという傾向が示されたが、これは頭子音が存在する場合に限られることが明らかとなった。また、頭子音が増えた場合には母音持続時間の長さは大きく変わらないということが示された。

## 3. 英語における音象徴——ヒーローのイメージに関する実験研究

福岡大学博士課程前期 神谷 祥之介

音象徴の議論において、有声阻害音は汚いなどのネガティブなイメージを喚起するとされている。これに関連して、音と悪役らしさの結びつきについては、有声阻害音は無声阻害音よりも悪役の名前に選ばれやすいことが報告されており、獲得が遅い子音ほど悪役らしさという印象に結びつきやすいことも示されている。しかし、悪役とは対極の存在であるヒーローの名前における音象徴については未だ検証が行われていない。そこで、本研究では、ヒーローの名前としてどのような子音が選択されやすいのかを検証するために、イギリス出身の英語母語話者に対して無意味語を用いた知覚実験を実施した。実験の結果、悪役名に見られた音象徴のパターンとは対照的に、無声阻害音の方が有声阻害音よりもヒーローの名前として選択されやすく、また、獲得が早い子音ほどヒーローらしいというイメージに結びつきやすい傾向が示された。

## 4. 省略文に課せられる同一性条件再考

九州大学大学院修士課程 末永 広大

本発表では、動詞句省略文における一般動詞句とbe動詞句の差異を、形態的同一性では正しく捉えられないことを指摘し、省略文に課せられる同一性条件の再考を試みる。

(1)に見られるように、wh演算子がCP指定部に併合されるwh疑問詞節においては、形態的同一性を遵守していても、一般動詞句の省略は適用されるが、be動詞句の省略は適用されない。

- (1) a. I don't know who John won't criticize, but I have a good idea about who he will.  
b. ?\*I don't know what Bill should be proud of, but I know what John should.

そのため、本発表では、動詞句削除を派生的アプローチから説明する Park (2017)の主張に照らして、先行研究で提示されてきた動詞句削除に課せられる同一性条件の不備を克服し、これまでの先行研究では取り上げられて来なかった相助動詞 have を伴う wh 疑問詞節、比較構文や tough 構文など、A バー移動を伴う場合の動詞句省略の可否を考察し、より広範なデータを説明する分析を提示することを目的とする。

## 5. 場所句倒置構文の派生と構造

九州大学大学院修士課程 宮元 創

本発表では、Chomsky (2013, 2015)における Labeling Algorithm の観点から、英語の場所句倒置構文 (Locative Inversion: LI)に対して理論的説明を与えることを目標とする。LIは、(1)が示すような場所句が動詞の前方に、意味上の主語が動詞の後方に現れる構文で、先行研究 (Bresnan (1994))では、LIの特徴として、前置された場所句は主語的特性と話題化の特性を持ち、動詞は後置の名詞句と人称・数一致をすることが示されている。

- (1) Into the room came John.

Culicover and Levine (2001)では、LIは非対格動詞と受動態に限られる軽場所句倒置構文と非能格動詞や一部の他動詞といった非対格動詞以外の動詞を用いる重場所句倒置構文の2種類に分けられると提案している。本発表では、この分析を援用しながら、素性継承と長距離一致を想定することによって2種類のLIの派生と構造、さらにLIが持つ特徴を捉えることができると提案する。

最後に、本発表で提案する Labeling Algorithm における長距離一致のメカニズムを用いることによって、LI以外の構文に対しても説明が与えられることを示す。

## 6. 周辺部構造における数量詞遊離現象

九州大学大学院修士課程 川満 潤

本発表では、数量詞遊離現象に関して、Sportiche (1988)で初めに提案された移動分析 (残留分析) の立場から、数量詞がどの位置で遊離するのかに関して、vP(v\*P)の周辺部が豊かである構造を仮定し、カートグラフィ分析に基づき、数量詞遊離文の派生を議論する。

- (1) The students have all finished assignment.

具体的に、上記(1)に示す文において、数量詞 all が遊離している位置は主語が初めに併合される vP 指定部の位置ではなく、より高い位置の機能範疇に移動した後、数量詞遊離が起きることを主張する。この際、談話的な要素の一致により数量詞遊離が起きると提案し、移動分析の新たな可能性を提供する。また、数量詞遊離現象における移動特性に関して議論する。ここでは、数量詞遊離は A 移動とは共起するが、A' 移動とは共起しないという言語事実に基づき、この現象がどのような制約から導かれるものであるのか論じる。



## 7. 英語と日本語の二次述語の比較考察

九州大学大学院修士課程 久保田 舞

英語には二次述語構文と呼ばれる構文がある。John ate the meat raw drunk.のような文における raw や drunk のようなものが、二次述語である。英語の二次述語は一般的に、目的語指向叙述、主語指向叙述、結果の三種類に分けられる。二次述語には、一つの文中に共起する際、その順番は必ず結果の二次述語>目的語指向の二次述語>主語指向の二次述語の順に生起しなければならないことや、Wh 移動の可能性について違いがみられるなどの統語的特徴がみられる。また、二次述語構文は、日本語にも存在しており、日本語における二次述語は、目的語指向叙述の二次述語の場合に限りスクランブリングが許されるなどの統語的特徴を持っており、こちらも目的語指向の二次述語、主語指向の二次述語、結果の二次述語の統語構造には違いがあるようである。このような英語と日本語それぞれにおける、三種類の二次述語の振る舞いの差を観察し、それらを念頭に日本語と英語の三種類の二次述語の統語構造と、それらの共通点を考察する。

## 8. Tough 構文のフレーム分析——主語の属性について

九州大学大学院修士課程 藤原 実莉

Tough 構文とは、John is easy to please. に表されるように、[NP + be 動詞 + 形容詞 + (for 名詞) + to do]という統語形式で表された構文のことである。Tough 構文は主語の属性を表しているという特徴があるが、Tough 構文で使用可能とされる dangerous や impossible などの形容詞を使った \*Friends are dangerous to meet in New York. や \*Winter is impossible to climb Mt. Fuji. は非文法的であるとされる。両者は一見、友人や冬に関する属性を表現しているかのように捉えられるが、主語と形容詞の持つフレームの違いから非文法性を生み出していると考えられる。例えば、friend によって想起される要素は、発話者と親しく関わっているという関係性である。この関係性が dangerous という危険な要素と結びつかないのが原因であると考えられる。この主張を裏付ける更なる事実として、Tough 構文は総称文であるという特徴も用いながら、Tough 構文が表す主語の属性についてフレーム分析を用いながら解明していく。

## 9. There 構文の派生

九州大学大学院修士課程 森竹 希望

英語の there 構文における一致は、時制要素 T といわゆる意味上の主語 (associate)の間で行われ、その結果 associate に主格が付与されると一般的に考えられている (cf. Cardinaletti (1997), Chomsky (2000))。しかしながら、一致が T と行われていないように見える事例 (= (1a)) や、associate に主格以外の格が付与される事例 (= (1b)) もある。

(1) a. There is / 's lots of cookies on the table. (Schütze (1999: 469))

b. There is only me in that picture / \*There am only I in that picture.

(Sobin (2014: 386))

従って、there 構文の分析にはより一層の精緻化が求められる。

そこで本発表では there 自体に焦点を当てつつ、there 構文の統語構造と派生を分析し、(1)における文法性の原理的な説明を試みていく。Bolinger (1977) や Kuno (1971) に

よる *there* 自体の機能に関する言及を示すだけでなく、分裂文において *there* を *it* の代わりに用いた事例などにも着目する。それらを踏まえた上で、本論では *there* が虚辞的性質だけでなく、ある種の *referentiality* を持つ場合もあると主張する。さらに、その場合は *there* 自体が一致に影響を与え得ると提案する。この分析のもとで(1)に対して説明を与える。

## 10. 逆接が認可する述語前置

九州大学大学院博士後期課程 高場 清子

(1)のように逆接の意味を表す副詞節 *if* には述語前置が起こりうる。

- (1) *If so short of teachers we are, why don't we send our children to Germany to be educated?* (cf. Laskova (2012: 398))

逆接 *if* は *though* に置き換えることが可能であり、以下のような述語前置が起こりうる。そしてこの *though* は *as* に置き換えることが可能であり、(3)のような一般動詞の前置も起こりうる。

- (2) *But young though(as) he was, Wallace was a killer, fast and dangerous as a striking rattler.* (FIC: A dangerous man: a novel of William “Wild Bill” Longley: New York : Pinnacle Books, Kensington Publishing Corp., Johnstone, William W.), (COCA 2014)

- (3) *Try as(though) he would, he couldn't imagine the kind of malevolence that could do such a thing.* (FIC: A cold treachery: New York: Bantam Books, edition: Bantam mass market ed., Todd, Charles.), (COCA 2005)

Hooper and Thompson (1975)は(4)の *be* 動詞を越えての移動や(5)の動詞句前置を根変形的一种と捉え、根変形を補文や副詞節における命題の断定性に基づいて起こるものとした。

- (4) *He has written a good thesis, (al)though to have spent a whole chapter on Preposition Hopping was probably a mistake.*

- (5) *Mary plans for John to marry her, and marry her he will.*

(Hooper and Thompson (1975))

しかし、(1)-(3)の述語前置は必ずしも断定性に起因するものではない。よってここでは、逆接 *if*, *though*, *as* 節内の統語構造とそれぞれの主節との結合位置を、演算子移動を想定し、カートグラフィ分析に基づいて検証したい。

## 11. Merge に伴う不可避的複雑性の増大と最小性について

九州工業大学非常勤講師 山本 将司

Chomsky (2017)の *Recursion* は、ある統語計算の段階までに生成された対象は以降の統語計算でも利用可能であるという考え方である。だが、この考え方から *Internal Merge*, *IM* が自由であるということは直接帰結しない。

本発表は、統語計算の複雑性を増加させるのは Chomsky (2017)が提案する *Workspace*, *W* の書き換えだけであると主張する。そして *W* は *Merge* の適用だけによって書き換えられるので、従って、*IM*、*EM* に限らず *Merge* は常に *Last Resort* 的であり、その回数なるべく減らす方向へ統語派生は進んでいくということを主張する。さらに、このように主張することで、*Search* に伴う複雑性を否定することによって、説明ができなくなる現象と考えられる優位効果現象 (*Superiority Effect*)や *that*-痕跡効果現象 (*that-trace effect*)の説明も可能であることを示す。

## 12. 変化結果を表す *in/into* 前置詞句の交替について

(招待発表) 九州大学教授 江口 巧

小野 (2011)で指摘されているように、状態変化動詞の用いられた「本来的結果構文」(影山 (1996)) (用例(1))では、行為動詞の用いられた「派生的結果構文」(用例(2))と異なり、結果句に *into* 前置詞句ばかりでなく、*in* 前置詞句も生じることができる。

- (1) John broke the stick {*in/into*} pieces.
- (2) John pounded the metal {*\*in/into*} pieces.

しかし江口 (2019)では、(3)のような位置変化を内在する状態変化表現では *in* 前置詞句は顕著に用例が少なくなることが明らかにされている。

- (3) John broke the egg {*?in/into*} the glass.

本発表では、この現象を左右する要因が、変化結果を表す前置詞句のもつ意味概念が、動詞が本来有する意味論的情報に由来するものか、あるいはシナリオ(江口 (2019))もしくは動詞のクオリア構造(影山 (2005))等に基づく語用論的情報に由来するものかにあることを主張する。この分析法は他の言語現象にも汎用的に適用することができ、例えば、以下に見られる2つの用例における *in* 前置詞の容認性の違いについても説明が可能となる。

- (4) He tore the paper {*in/into*} two halves.
- (5) He tore the shirt {*\*in/into*} bandages.

## シンポジウム

### 英語学部門

#### 焦点化現象に基づく統語構造研究

司会	九州大学教授	西岡 宣明
講師	九州大学助教	大塚 知昇
講師	西南学院大学准教授	前田 雅子
講師	九州共立大学准教授	黒木 隆善
講師	産業医科大学講師	下仮屋 翔

統語的焦点化の手段として、焦点化移動、(擬似)分裂文を用いる方法がある。また、削除現象において削除を受けなかった要素には焦点化が関与している可能性が高い。焦点化には節(CP)周辺部と動詞句(vP)周辺部の機能範疇が重要な役割を果たしていると考えられるため、焦点化現象に照らして統語構造ならびに統語理論を考察することは現象の解明のみならず、理論的にも有意義な帰結が得られることが予想される。そこで、本シンポジウムでは、派生の単位としてのCPとvPのフェイズ理論とその周辺領域の詳しい内部構造の解明を試みたカートグラフィ分析に照らして、焦点化に関わる現象を考察する。特に、統語構造のラベリングの問題を議論して、統語構造の精緻化と理論的貢献を目指す。具体的には、カートグラフィとフェイズ理論の整合性の検証(大塚)、CP領域とvP領域に関わる倒置と削除のラベリング分析(前田)、分裂文のカートグラフィとラベリング分析(黒木)、動名詞構文における削除と前置現象に照らしたvP領域とCP領域の内部構造の検証(下仮屋)をおこなう。

## カートグラフィとフェイズ理論の和解？

大塚 知昇

焦点化を含む左周辺部的現象に関し、Rizzi (1997)を代表とするカートグラフィ研究が盛んに行われてきた。しかし Chomsky et al. (2019: 25)が論じたように、習得可能性(acquirability)と進化可能性(olvability)の観点から、カートグラフィの立場とフェイズ理論の立場の間には軋轢が存在すると言える。本研究はこれら両研究の互換性を検証し、両者の和解を目指すとともに、カートグラフィ研究が抱える理論的問題点を整理し、その解決を試みるものである。本研究では、Chomsky (2015)以降のフェイズ理論の枠組みのもとで導きうる「単純化した左周辺部」と、左端におかれた要素と談話効力的解釈の間の「マッピング一般化」を提案し、これらに基づき両研究の互換性の確保と、カートグラフィ研究の理論的問題点の解決が可能になると主張する。

## 倒置と削除に関する labeling 分析

前田 雅子

本発表では、Chomsky (2013, 2015)で提案された Labeling Algorithm (LA)のもとで、補部の移動または削除による XP-YP 問題の回避について考察する。YP が不可視になるパターンとしては、下記の二つが考えられる。

- (i) {XP, YP}構造において、YP が移動した場合/削除された場合、XP がラベルとなる ( $\{\alpha \text{ XP, YP}\}$ :  $\alpha = \text{XP}$ )
- (ii)  $\{\alpha \text{ XP, } \{\beta \text{ Y, ZP}\}\}$  において、ZP が移動した場合/削除された場合( $\{\alpha \text{ XP, } \{\beta \text{ Y, ZP}\}\}$ )、 $\beta$  のラベルは Y となる。また、 $\beta$  が主要部としてラベルの再解析が行われるため、 $\alpha$  は YP となる。

いずれの場合も適切にラベル付が行われるため、結果として vP 内主語が可能になる。この提案により、locative inversion などの倒置文における他動性制約や、as-inversion や comparative inversion における義務的な VP 削除などの事象を分析する。

## 英語における It-Cleft 構文の焦点位置に関する考察

黒木 隆善

本発表では、英語における It-Cleft 構文の焦点位置について検討する。It-Cleft 構文は、(1)のように、代名詞と copular の後ろに焦点要素が生起する構文である。

- (1) It was JOHN that Mary saw. (Reeve (2010: 12))

It-Cleft 構文の焦点位置については、カートグラフィを想定した Belletti (2015)等で、copular より下位にある FocP の指定部へ要素が移動することにより、focus の解釈が生じると分析されている。カートグラフィを想定すると、焦点要素の FocP 指定部への移動は、Rizzi (2006)で提案された Criterial Freezing が生じるため、要素の更なる移動が許されないと予測されるが、It-Cleft 構文においては、(2)のように、焦点位置からの Wh 句の移動が可能である。

- (2) What was it \_\_\_\_\_ that Mary saw?

本発表では、Belletti (2015)等における It-Cleft 構文の構造を再検討しつつ、(2)の事例に対する新たな解決策を模索する。特に本発表では、Shlonsky and Rizzi (2018)で提案さ

れた、Label と Maximality に基づく Criterial Freezing 分析と Chomsky (2013, 2015)の Labeling Algorithm の修正を想定することで、焦点要素が FocP 指定部へ移動したとしても、要素の更なる移動が許される、という可能性を検討する。

## 動名詞構文の派生について ーラベル付けアルゴリズム分析と焦点化現象から

下仮屋 翔

英語の動名詞構文は、形容詞ではなく副詞に修飾され、主語に虚辞が生じるなど、節のように振る舞う。一方で、その生起環境は格位置に限られ、定形節とは異なる統語的特徴が多々みられるものの、近年のラベル付けアルゴリズム分析の観点からは十分に検討がなされていない。そこで本発表では、接辞-ing の統語的地位を考察し、経験的事実に照らして当該構文の統語派生を明らかにするとともに、その特徴を原理的に説明していく。具体的には、動名詞節内では動詞句削除が許されない事実(=(1))ならびに主節現象が許されない事実(=(2))から、vP 領域と CP 領域の構造を精査していく。

- (1) a. I know of Chomsky criticizing the Viet Nam War, and I know that Obama did, too. (Sato (2017: 135))  
b. \*I know of Chomsky criticizing the Viet Nam War, and I know of Obama, too. (Sato (2017: 136))
- (2) a. John believes that Bill, Mary doesn't like. (Nakajima (2016: 118))  
b. \*I disapprove of such books your reading. (Hooper and Thompson (1973: 485))